

教員と学生に対する教育を考える—FD義務化を迎えて—

鈴木健一・足立由美

2008 年 5 月 15～17 日、金沢大学保健管理センターで学生相談に携わるスタッフが中心となり、金沢工業大学や県内の学生相談に従事している臨床心理士と共に、日本学生相談学会第 26 回大会を金沢市で開催した。ここでは、「教員と学生に対する教育について考える—FD義務化を迎えて—」と題したシンポジウムを報告する。なお紙面の関係上、話題提供者と指定討論者の許可をいただき、編集をしている。

設置基準の改正により、FDは全ての高等教育機関の法的義務となった。すでに 2000 年 6 月のいわゆる廣中レポート『大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—』は、「全学的・組織的にFDを進める中で、積極的に教員に対する教育・指導についての研修を行うことを求めている。この際、正課教育における授業内容・方法のみに限定するのではなく、学生の人間的な成長を図る観点から必要な指導についても、その研修内容に加えることが適当である」と指摘している。2008 年度より始まった文部科学省の学生支援GP審査要綱は「学生支援を行う教職員の資質向上(FD)」と明記している。今や、学生支援に関する教員研修・教育は、学生相談を中心とする学生支援が全学的に行われるためには不可欠である。学生の立場に立つ大学教育改善に向けて、シンポジストによる報告を起点に議論を深めたい。

日 時 5 月 17 日 (土) 14 時 00 分～16 時 00 分

会 場 石川県文教会館ホール

司 会 武山 雅志 (石川県立看護大学)、鈴木 健一 (金沢大学)

話題提供 青野 透 (金沢大学) 齋藤 憲司 (東京工業大学)

森田 裕司 (広島経済大学) 太田 裕一 (静岡大学)

指定討論 鶴田 和美 (名古屋大学)

学生相談から始まるFD、そしてFD義務化から始まる 新たな学生相談

青野 透 (金沢大学)

青野 こんにちは、青野です。今回 5 つの問いをみなさんといっしょに考えようと思っています。

最初に、なぜFDは法的義務になったのかです。FDという言葉は、実は法律あるいは法令にはないんです。このFDという言葉、解釈、説明をするのは大学設置基準という法令を出した文部科学省が有権解釈をします。FDの義務化というのは最初に専門職大学院で始まりました。そしてその他の大学院に施行され、この4月から学部段階ということですので全ての高等教育機関に投網をかける形でFDが義務付けられました。文部科学省

の高等教育局長通知の文章には次のように書いてあります。「いわゆるFDについては、これまで努力義務であったものを義務化するものであるが、これは大学の各教員に対し義務付けるものではなく、各大学が組織的に実施することを義務付けるものであること」。ポイントはこのFDの義務化というのは、あなたはやっていきますかという風に、教員に向けて言われる事柄ではなく、大学の責任なんですね。全国の大学、短大、1千以上ありますが、それぞれの大学の責任なんです。続けて「これを踏まえ、各大学においては、授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った取り組みを行うことが望まれること」とあります。国が行っているFDの説明の中で最も新しいものではこの説明しかありません。こ

の 4 月 1 日から効力を持ちました大学設置基準にもこう書いてあります。第 25 条の 3「大学は、当該大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究を実施するものとする」。

今日の話の中で中心になるのは「大学は」という主語だということです。ですから先ほどの文部科学省の通知文にありました「授業の内容および方法の改善を図るための組織的な研修および研究」を、噛み砕いて 3 つのポイントを指摘したいと思います。まず、これは「大学が」行うことである。「1 人 1 人の教員が」ではなく、大学が組織として行うということが重要なポイントです。続いてポイントの二つ目、従来の FD はともすれば授業の方法の改善に終わっていました。例えば学生による授業評価、これはおそらく全ての高等教育機関で行っていると思いますが、そこには、一番後ろの人にまで声が聞こえたか、板書の仕方は・・・ということが取り上げられていました。ようやく最近になって内容の理解度を問うような学生授業評価、アンケートも行われるようになってきました。大事なのは「どのように」ではなくて「何を」であるはずで。そしてポイントの三つ目は、今までは「講演会・研修会を行う」ということで FD を済ませてきたわけですが、きっちりと組織的な「研究」にしなければならないということです。大学は学問の府であります。さまざまな学問について私たちは研究をしています。FD である以上それを組織として行う。これは非常に大きな改革です。この 3 つのポイントをそれぞれおさえる必要があります。

そしてこの FD の義務化については先ほどの条文だけが注目される場合が多いのですが、法というものは体系で考える必要があります。大学設置基準では、他の部分も同時に変わりました。例えば第 2 条の 2「大学は、学部、学科又は課程ごとに、人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的を学則等に定め、公表するものとする」とも義務付けられました。私はもともと法学部の教員ですが、どういう学生を育てるのか何も書いてない。それでよかったんですね。だれも問わなかった。しかし、それはありえないことですね。「あなたの大学のこの学部のこの学科のこの課程は 4 年後、6 年後にど

んな学生を社会に送り出していくんですか」ということを問われて、それを全員の合意といいますか、学則等に定める必要、さらにそれを公表するというのが義務づけられました。

そして今回いくつかの部分が改定されましたが、たった 2 語加わった条文もあります。第 19 条「大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業目標を自ら開設し、体系的に教育課程を編成するものとする」。この「自ら」という文言が新しく入りました。例えばある科目について、外部の教育機関に丸投げするといったことが起きると問題になるわけです。教育責任がある以上、体系的に教育課程を編成し、それに基づいた教育を自らの責任で行うということを義務付けました。

文科省が言うような FD を、今まで努力義務の中でやっているとこはやってきた。でも成果や内容が伴っていなかったと一般的に言われるのは何でなのか。改正前は努力義務でしたが、そうなったのも平成 11 年ですからそんなに昔のことではありません。その翌年から文科省は努力義務の中でどんな風に自主的に大学が改革を行ってきたか調査をしました。17 年度で約 8 割の大学が「うちの大学は FD をやっています」と答えた。8 割やっていればいいのか。8 割の中身が問われ、どこまで浸透しているのか、実際に組織として行っているのかが問題になったわけです。文科省の調査項目の 8 項目として、研修会、授業参観、講演会、FD のセンターを設置するなどがあり、これらが主要な FD の中身でした。文科省のホームページにあるものですが、「FD を行っている」と答えている大学の数は増えてきたのに、実際には授業内容、授業方法の改善に繋がっていなかったというのが国の判断、あるいはこの設置基準の改正に至った各種の審議会の判断となったのです。一つ考えられることは「組織的に」実施していなかったということです。じゃあ組織というけれど、大学には教員しかいないのか。

そこで出てくるのが「内容が伴った、あるいは成果を生む FD には何が必要か」という問いであります。廣中レポートに、大学の教員は教育する訓練を受けていない、だから FD を行うのであれば正課教育における授業内

容、方法のみに限定するのではなくて、学生に対する指導についても研修内容に入れるべきだとありました。学生中心の大学づくりを進めるべきである、教員の基本的責任として学生の自立を促すための指導をする。多様な学生に対する決め細かな教育・指導に重点を置く学生中心の大学へと視点の転換を図らねばならないという提言を行ったわけです。これは非常に感銘を受ける文章ですけれども、学生相談の機能は大学教育の一環であると廣中レポートは結論づけたわけです。学生相談は大学教育の欠かせない一つの環であると明言したわけです。そういう前提があっても私も一教員として「なんでも相談室」の設立に関わりました。ここで確認したいのは教員も学生相談の担当者であり、学生相談学会の広い裾野に入ると私は思っています。なお国立大学法人法の中に、国立大学法人が行うべき1番重要なのは大学の設置ですが、2番目に重要なものとして学生相談を挙げています。これも大きな変更点です。そして学生支援機構というものが作られ、そこで研修の機会もちゃんと作るという風に国の姿勢が変わってきました。

さて最初に確認した大学設置基準25条の3に当てられたタイトル「教育内容等の改善のための組織的な研修等」に、私はFDの実質化のためのキーワードを求めたいのです。「教育内容」が変わらねばならないということを含め、このタイトルに表しているわけです。ですからFDの定義を私達は「教育内容等の改善のための組織的な研修等」という風に確認したいのです。これまでのFDは簡単に言えば教室の中だけの、授業方法についてだけの、個々の教員だけの、教員による教員のための、あるいは、文科省からの問い合わせがあるからアリバイ作りのためのFDという動きでした。

そこで問い直しが必要となってきます。FDは一体誰のために、何のために行うのか。私は「教員が」という主語ではなくて「学生主体の大学を」という視点に立って、教員が何を教えたかではなくて学生が何を学んだかのほうが遥かに大事であると考えます。あくまでも「FDは学生のために行うんだ、学生の学習のために行うんだ」ということを、廣中レポートを引っ張り出すまでもなく当たり前のことなのですが求められています。これ

からの大学教育は多様な学生の学びを教員が中心となって大学人みんなで支える。こんな風に大学を変えていかねばならない。教育とはなにか、さまざまな定義がありますが私は真実に向き合う力を1人1人の学生が見に付ける。非常にづらい、きつい作業になるかもしれないけれど、そういう教育は少なくとも授業だけではできないはずです。学生相談の意味もここにあります。

最後に、カウンセラーがFDに積極的に関わることに意味があるのか。これはもうみなさん自身が感じられていることだと思います。学生相談は教育内容あるいは教員の意識改革が起こらなければ有効に機能しません。組織、FACULTYとやる、それを活用する。組織性を重視するFDにカウンセラーの方々が積極的に関わることによって学内の認知を高める、同時にカウンセラー自身が様々な教員、様々な職員との連携を取る、組織対応能力を高めることが学生のためになっていく。廣中レポートを繰り返しますが、我々教員にも学生相談力をつけさせてください。そのために教員に対する教育、啓蒙が必要になってきます。与えられた時間が参りました。次の齋藤先生にバトンタッチしようと思います。司会 青野先生どうもありがとうございました。

カウンセラーが担う教職員研修—学生相談を見渡す／深める循環として—

齋藤 憲司（東京工業大学）

齋藤 東京工業大学の齋藤と申します。まず1番、「カウンセラーが講師を担う意義」です。青野先生の話にも含まれていましたけれど、なにより1)「学生のために」のはずだと私も考えます。教職員の方が学生支援・学生相談の意識を高める、あるいは対応の仕方がより良い方向に変わってくことで学生に還元されるというのは当然のことです。そして、適応や学習に苦労している学生の生の声を聞いているわけですから、そこからうかがえるキャンパスの諸状況・諸問題を教職員や執行部に届ける責任があるだろうと僕は思います。そのためにFD研修が活用できるわけです。そして2)「教職員のために」。これは学生の理解や対応のための示唆やヒントを提示することで教職員の方々が安心してくださる。あるいは

学生対応を通じて、ちょっと恐縮な言い方ですけど心理的に成長して下さることもある。あるいはその方のこれからの生き方になにかしらのヒントを提示させていただくことが可能かもしれない。そして教職員の方々が研修会を受けることで、ネットワーク作りのきっかけにもなるわけです。そして 3)「カウンセラーのために」。これは研修の講師を務めることで自分の活動を点検したり、あるいはどういう内容を伝えたいのか、どういう言葉だったら伝わるのかということを吟味することになります。そしてカウンセラーの存在や活躍を目に見える形で提示する。これは「私が頑張ってます」というんじゃないくて、「非常勤の立場でこんなに頑張ってくださいてるんですよ」とか、あるいは他大学に呼んでいただいた場合には、「この大学のこの先生の仕事ぶりはこういう点がすばらしいと思います」等々応援させていただくことで、お互いの足場を強めていきたいというふうに思ってきました。

そして 2 番「教職員研修の実際／学生相談活動における循環」ですね。そのための 5 つの視点というものがあるかなと思います。1)「学生相談、個人相談との循環」です。現場の感覚から、そして学生の個別性に基づいた支援が大事であり、その 1 人の学生の悩み苦しみに普遍性があるんだということを伝えていく。東京工業大学でも数年前から、FD 研修「大学力を大きく育てる教育の向上」に踏み出しています。毎年私も参加してお話をさせていただいているんですが、今年は学長先生と副学長 4 名のうち 3 名が参加されるということだったのではりきってお話をしました。相談活動から見えてくる本学の課題や、そこに ABC という形で最近話をすることが多いです。A、騒々しいケース。事件やハラスメントとか暴力とかいろんなトラブルに巻き込まれて、だれもかれも心が落ち着かなくなるようなケースが増えている気がします。B、静かに潜伏するケース。気がつかないうちに学生達が竈ってしまったり、大学からいなくなったりしている。もうちょっと積極的に働きかける必要があるのかもしれない。そして C、引き裂かれるケースですね。胸が苦しい、心が引き裂かれるようなそんな思いになることがキャンパスの中で、外で起きてい

る。命に関わる、自殺やうつ状況ですね。これについては自殺予防のためのレクチャーを、全学部の教授会でお話をさせていただきました。このような感じでカウンセラーだからこそ分かる状況と伝える言葉というのを工夫していきたいものだと思います。

2)「学生対象の授業との循環」。これは後ほど森田先生、太田先生からもお話いただけたと思いますが、まず「授業を担当すること、そこで工夫すること」です。おそらくみなさんもそうだと思うけど、双方向性指導でなるべく学生の行為を引き出す、こちらからも相談活動から得たいろんな思い、学生達の思いを集約して、さしきわりのない形で伝える。あるいは学生達の授業からでてくる言葉にフィードバックする。それがこれからの研修のデータになる。それをまた活用して学生達、集団の場で話させてもらって「こんな意見もありました」というようなことを教職員研修会で使わせていただくことがよくあります。

3)「学内外の委員会活動との循環」ということです。例えば、適応支援教育(導入教育)の実際ということで、もともと教育担当副学長のもとで教育推進室という組織があります。私もそのメンバーです。東工大の場合には 4 年生・大学院生は研究室に所属するのでその学生達へのケアは手厚い面があります。逆にハラスメント問題という課題も抱えています。学部生へのケアというのは、私が言うのもなんだけど「ほったらかしみたいなどころがあるんでちょっと考えましようよ」という話が出た時に、こういう側面から、「1 年生あるいは 2 年生あたりをケアしていくことを一緒に考えませんか」という会議資料を作ったわけですね。適応支援教育という名前を私の方で付けて、「具体的な諸活動としてこういう行事をとかこういう環境整備をとか、教職員の方にはこういう継続的な関わりを、さらに踏み込んだ支援が必要になっている時代かもしれないね」という話をしました。学生もそうですけど、教職員もできるだけ短い時間で分かりやすくという風潮がありますので、基本的には資料は 1 枚にコンパクトにまとめるということをしてできるだけ施行して進めているところであります。それから学外(各校共通の課題に向けて)ですね。とりわけ理

工系大学ということもあるのでアカデミック・ハラスメントと言われるような、研究教育上の権威関係に基づく上位のものから下位のものへの、多くは教員から指導学生への嫌がらせ的な諸問題が起きているということで、5大学の先生方で協力して「アカデミックハラスメント防止ガイドライン作成のための提言」というのを作らせていただきました。この中で研修に使えるものとして模擬事例を作成しました。それも1事例1ページにまとめて前半が事例内容、後半に解説文を付けるという形なるべく研修に使いやすいようにと工夫もいろいろさせていただきました。

それから4)「所属校と訪問校・全国的会合との循環」ということで、この学会自体もそうですけど、各大学での個別性に応じた学生相談を作っていくためには交流の機会が絶対に必要であるということですね。例えば数年前にメンタルヘルス研究協議会というものを東工大で開催させていただいたんですが、その時には金沢工業大学の石川憲一学長先生にお出ましいたいて、その節はどうもありがとうございました。貴重なお話を伺い、また昨年はGP予算で訪問させていただいたんですが、やろうと思えばここまで面倒を見る、学生のために大学を変えていけるんだなということをそのままありのままに学ばせていただける非常に貴重な機会でした。ある意味衝撃的でもありました。いろんな大学に訪問させていただくごとにいろんな発見がある、あるいは私の話からいろいろ感じてくださるということも深い意義があるかなあという風には思います。さらにはこれもおそらくお持ちいただいていると思いますが、「大学における学生相談体制の充実方策について」。先ほど青野先生にご紹介いただいた廣中レポートの続編という位置づけで「総合的な学生支援と専門的な学生支援の連携協働」という副題で苦米地先生のもとで作らせていただきました。その中の三層モデルやその他の図表などは非常に研修に使いやすいものになっていますから是非ご活用いただければと思います。

それから5)「研究活動との循環」です。学会でどんな発表しましょうということですね。実は私、昨年研修をどう向上させるかという研究発表をさせていただい

て、その意味ではこのシンポジウムでは話のストーリーが作りやすかったというところもあります。そして自分の大学の年報や報告書に是非1年間の活動を基にした若干の何かを書いていただくと、それは後で必ず自分の研修で使う時にいい材料になるということがあるかなと思います。

3番、「教職員研修を組み立てる軸・枠組み」です。参加人数が数名から数百人、属性もカウンセラーだけとか事務職員だけとかそういうのからいろんな人が混ざっているのもあれば、テーマも学生相談、学生対応総論だったり、ハラスメントとか自殺問題とか特定のなことだったり。時間も教授会で時間が余ったら10分だけ話してくれということもあれば2時間、あるいは1日、あるいは全国研修会などで3日間、いろいろありますね。それをどう自分の中にインプットするか。そして形態としてはできればレクチャーよりは実習形式のほうがいいのだと思います。それをどう組み込んでいくかですね。日本学生支援機構の学生相談インターカセミナーという300人規模で1日がかりの研修会で使ったものですが、ウォーミングアップとして「私達は1日に何人の学生たちと接しているのでしょうか？」昨日あるいは近々の1日を振り返ってみましょう。(1)直接対面して実際に言葉を交わした学生の人数は何人いるのでしょうか。(2)視野に入った・すれ違った学生の人数は？(3)ふと思ひ浮かべた、「あいつどうしてるかな」とか「どう対応してやったらいいんだろう」という風に指導法とか接し方を考えた学生の人数は何人ぐらいでしょうか。こんなふうにして「学生達の姿や顔や表情、仕草、服装、あるいはその学生が書いた文字なんかが浮かんでくるものではないでしょうか」というウォーミングアップをさせていただいてから、それは300人ぐらいの規模だったんですけど、もう少し小さい規模なら必ず少人数で話をして相互交流してもらおう。

4番、「よりよい教職員研修のために」です。いかに1)予習や準備をするか。自分の中のモードを切り替える。そしてイメージ作り。リハーサルを行きの会場に向かう電車の中で行ってみたり、あるいは前の晩に行ってみたりですね、そして全方位の資料収集と洗練。そして2)

一回性への恐れと面白さ。カウンセリング以上にうまく行くか行かないかというのはその時の自分に、あるいは参加しているみなさんとのコミュニケーションのあり方に関わっているかなという気がします。そして 3)でできるだけニーズに応える。そしていろんな循環性を作っていくって自分の中に教職員研修というものをうまく位置づけて行きたいものだなと、あるいは仲間の皆さんにもそう是非、一緒に努力を重ねていければなという風に思います。ありがとうございました。

司会 齋藤先生ありがとうございました。

学生相談室による新入生対象の講義の試みから

森田 裕司（広島経済大学）

森田 広島経済大学の森田です。私は現職に就きまして 15 年になります。学生相談という仕事は大学コミュニティの中に位置づけられていて、それをどう活かすかというところに面白さがあると最近思うようになってきました。試行錯誤の毎日ですが、今日は新入生対象の講義の 6 年間の取り組みについてお話しします。

講義立ち上げの経緯と目的です。まず講義を立ち上げた理由ですが、人としての土台、大学生になる準備ができていない学生がずいぶん増えてきているということです。例えば、基礎学力や勉強の習慣、挨拶やマナー、現実吟味力、自尊心、対人関係、心の健康といったものが挙げられるかと思います。このような現状に対応するには、従来の大人扱いから大人になるように支え育てることが不可避の課題であると考えます。それから学生相談室の相談件数が増加の一途をたどっており、スクリーニングテストをやりますと神経症傾向を示す学生が増えていること、また退学者も増えているという現状があるということです。個人面接だけでは限界があるということです。

それからゼミのような少人数講義が苦手な学生もいますし、ガイダンスでは一度に膨大な量の情報を伝えるために、学生はうまく消化できないで困るというケースが増えています。ですので、時期に応じた情報を少しずつ提供する場も必要ではないかと考えました。

それから相談室の持っている情報を問題発生の予防

に生かせるのではないかと考えたことです。学生生活の落とし穴は毎年ある程度決まっています。それを私達相談室は情報として知っているわけです。それなら問題が起きるのを待たずに、先に伝えて問題の発生を予防したいという気持ちもありました。

ただし講義の立ち上げに対しては教員からは反対意見がかなりありました。例えば「大学の授業とは言えないんじゃないのか、こんなんでも単位を出してもいいのか」ということですね。理解を求める説明を繰り返すことでなんとか実現にこぎつけることができたという現状です。

講義の目的ですが、入門ゼミやガイダンスを補完する新入生のサポート対策の 1 つとして位置づけました。狙いとしては①新入生の大学生活への適応を促す②大学生活で生じやすい問題の発生を予防する③学生の人間的成長や発達を促す④学生相談室を身近に感じてもらおうの 4 つでした。

本講義は教養教育の選択科目に位置づけられ、1 年生の前期に限定して開講しております。2 年生以上は受けることができません。学生相談室の相談員の多様性をいかしまして、スタッフが交代で登場するオムニバス形式の授業としました。取り扱う内容ですが、できるだけ学生生活全体をカバーしたいということでテーマを選んでいます。第 1 回「オリエンテーション」、以後、「授業の受け方」「大学生のマナー、心の健康調査結果」「サークル活動、アルバイトの効用」「自立への歩み」「人付き合い」「2 ヶ月を振り返る」「資格・適正・進路」「学年ごとの課題」「心の健康」「ハラスメント」「試験の受け方、長期休暇の過ごし方」となっています。このテーマは 6 年間変わっていません。

講義の進め方はスタッフそれぞれが 1 回目の後半と 2 回目の前半、2 回登場するというリレー形式で行われました。1 回目は講義を行った後、小レポートですね、感想・意見・質問、それから体験など 200 字を提出させました。2 回目はもう 1 度登場しまして小レポートの内容を紹介してコメントを行いました。そしてすべての講義の終了後にまとめレポート 2000 字を課し、講義から学んだこと、自分自身の変化や気づきなどについて記述さ

せました。

結果に入ります。まとめレポートに書かれた受講生の変化や気づきには以下のようなものが見られました。①大学生活への適応に役立てることができた、②不安なのは自分だけではないんだと知って安心した、③学んだことを実際に大学生活で実践してみた、④問題の予防や解決ができた、⑤自己理解や他者理解が深まり、視野が広がった、⑥人付き合いが変化した、自己表現ができたということ、⑦今後役立てたい、⑧学生相談室に実際に行ってみた、話を聞いてもらえてすっきりしたということもありました。

本講義の成果ですが、6点挙げたいと思います。①大学とはどのようなところかを知らせることによって新入生の大学生活へのスムーズな適応を促すことができた。②入学時の不安を解消するためには「不安なのは自分だけではない」と知ることが効果的でした。他の受講生の声を聞くことにより、学生は自身の課題を安心して抱えるように変化したと考えました。③大学生活の留意点を前もって知らせることで、問題やトラブルを予防する効果があった。④大学生活を有意義に送るヒントや見取り図を提供したことが成長や変化のきっかけになった。⑤学生相談室スタッフを知らせる「顔見せ興行」になった。⑥スタッフどうしが刺激を受け、連帯感を高めることができた。ここまでは最初の2年間の取り組みで、3年目以降は予想外の試練が待っておりました。

学生気質のさらなる変化と講義手法や内容の修正です。1、2年目は伝えたいメッセージがよく伝わり、反応や手ごたえが十分ありました。3、4年目ですが、学生気質の変化や受講態度の悪化により効果が上がりにくくなっていきます。3年目ですが、私語や居眠りが増えました。受講生の声を聞いた上で名簿順の座席指定に踏み切りました。これにより私語は無くなったんですが、居眠りを起こすと反発する学生が出現しました。それから受身的な学生が増えました。理解する力、自分の事としてひきつけて考える力、それから文章にする力が低下しました。小レポート・まとめレポートが表面的、没個性的なものになりました。授業評価の自由記述量が激減するということからそのように推測しました。この年に

は受講生同士が知り合う機会として班対抗「キャンパスライフ・クイズ」というのを試みました。「学長のフルネームを答えよ」などです。初めは学生と知り合うことで「緊張する」とか「嫌だ」と思ったようなんですが、実施した後は「友達になれた」「またやりたい」とずいぶん落差が見られました。こういうことを今まで体験していないんだなど、学生の幼さや体験のなさも浮き彫りになった感じでした。

そうした工夫にも関わらず学生による授業評価が低下しました。この3年間の結果を学内研究集会というところで報告しましたところ、意外だったのですが、教員の共感を得て、連携に役立てることができました。例えば学生対応が難しいということの訴え、相談室から見た学生の動向をこれからも情報提供してほしいという声、それからゼミのプレ合宿に参加しないかというお誘いをいただいたりもしました。

4年目に入ります。一部に反発のあった名簿順座席指定を廃止しました。この年度の受講生は全体におとなしく、学生の顔が覚えにくいのが特徴でした。一部の学生が私語をし、注意しても繰り返しました。授業中に内職をしたり、レポートの盗作なども出現しました。内職は注意すると「個人の自由じゃないか」と言われました。レポートの盗作については呼び出したところ泣いて謝って書き直してくれました。受講生の負担を減らすために小レポートを字数自由にしましたところ、記述量が激減してしまい、まとめレポートを1000文字ずつ2回書くというように変更し、記述項目を具体的に示しました。その結果、生活ぶりが伝わる内容が増えたような気がします。それから受講生同士が知り合う機会として自己紹介と話し合いを3回行いました。これは「友達が増える」「人の意見が聞ける」と好評でした。次に受講生に「先輩に尋ねたいことを尋ねよう」ということでアンケートをしまして、先輩からの回答を紹介するという試みをしました。他にも定期試験の問題のサンプルとして「論述式試験にはこんなものがあるんだよ」というようなのを見せるという試みをしました。その結果、居眠りがやや減りました。授業評価の一部が回復しました。

5、6年目に入ります。受講生は3、4年目と比べ素直

でまじめでした。理由は分からないんですけども、ゆとり教育が関係しているのかなとスタッフで話し合いました。5年目ですが受講生同士が話し合う機会を毎回やるようにしました。くじによる座席列のみ指定しました。「話し合いタイム」をもったんですがこれは喜んで取り組んでいて、友人作りのニーズがずいぶん高いということがわかりました。「この講義が終わるのが寂しい」という声が最後のアンケートで多く寄せられていました。この結果を見まして、ちょっと「こちらが依存させすぎたなあ」ということを反省しました。

6年目です。講義自体をキャンパスライフ実践の舞台にするという試みをしました。レポート提出日に、出せない学生が10数人おりまして、どのように言うべきか、事情がある場合はどう振舞うのか、あるいは自己責任の場合はどうするのかというのをずらっと並ばせて一人ずつやらせました。それから、座席列の指定に関する受講生の声が様々出てきたので、いったん自由席にしてまた声を聞くという試みをしました。そうしますとやはり指定のほうが他の学生の意見が聞けていいとか私語が少なくて集中できるという声がでてきました。

授業の後半は大人扱いし、自立を促すということをやりました。「この講義でやった友達作りや話し合い、それから先輩からのアドバイスというのはある種、この授業という人工的な仕掛けの中でのことだよ」と。「これからは自分達でそれをやっていかなければいけないんじゃないか」と、脱錯覚を促すということですね。そして「今の君達ならきっとできると思うよ」ということで背中を押す形にしました。その結果、寂しさの訴えがこの年度では減少しました。授業評価がかなり回復しまして、初年度に次ぐ高さになりました。

6年間の取り組みから次のようなことが分かってきました。①私達は受講生の様子からその年の新入生の特徴を早期に把握することができた。いわば本講義は学生の「定点観測」ができるもう一つの窓と言えるのではないかと考えています。②学生の変化にどう対応していくかということが年々難しくなっている。なるべく基礎からを意図して低く設定しているはずの本講義の要求水準がすでに高すぎるのか、あるいはルールを厳しくした

りこちらが親切に手をかけすぎる、手をかけることが受講生の受身性を促進していないだろうかということをやずいぶん考えました。今後も慎重に検討していく必要があると思います。③学生に対して私達が感じた戸惑いや苦しみは、教職員と問題意識を共有し連携する際の貴重な資源となった。このあたりはFDとも関係してくる部分ではないかという風に思います。④時期に応じたモードの変化が必要である。新入生ですから最初是不安を鎮めるためにしっかり抱える。例えば安心させるとか、かまうとか親切に教えるとか学生同士をつなげる、あるいは私達大人とつなげるということが必要かと思います。それから時期を見て少しずつ自立させていく。徐々に大人扱いをして本来の大学コミュニティに引き渡していくというイメージですね。そういう風に変えていくことが大切なんだということを学んだような気がいたします。私の話は以上です。ありがとうございました。司会 森田先生どうもありがとうございました。

工・情報系学生を対象にしたインターネットを活用した講義の試み

太田 裕一（静岡大学）

太田 静岡大学の太田です。今日はデモンストラレーションということでやってみたいと思います。

普段アニメーションを使って講義をしています。福井大学にいた時は教育の学生がいたので少人数でグループワークを入れたりしていました。静岡大学に移りまして工学部、情報工学部からなるキャンパスに来ると、臨床心理学そのものに興味がある学生が少ない。そもそもそういうのに興味がある学生は自分から来談してくれる子が多く、むしろそうでない学生にいきなりカウンセラーとしての僕をアピールするかみたいなことを考えた時に、臨床心理学だけじゃちょっと訴えるものが少ないなと考えました。それでいろいろ実験したんですが、やっぱりアニメーションが一番いいかなということでやりましたね。つまり小説や映画だと結構長かったり、読んでなかったりっていうんですけど、ジブリとか皆さん結構見ているんで、アニメを取り入れて心の深層というものをやりました。私は本当はロックが好きなので去

年度からロックと、主に現代アートを取り入れて、ギターを弾いたり演奏したり、非常に楽しくやっております。そうすると結構 150 人くらい登録してくれて抽選になるんですけど、そうすると 1 学年 900 人くらいの中で 150 人の学生が来てくれて、毎回 400 字のレポートを書かせて。それを 15 回くらいやると 2500 通くらいのレポートを読むといった生活をしております。最初は全部レスポンスしていたんですが 100 人を超えてから大変なんでやめました。

どんな授業かっていうのをちょっとやります。最初のビデオをよく見ていただきたいと思います。物語の最初の部分です。はい、じゃあちょっと止めてください。普段私は教室の中を熊のように歩き回っているんですけど、青野先生いかがでしょう。

青野 鳥かごが出て、自由に…でもなんか中庭みたいなのこなのでそんなにまで外に飛び出せるわけではないという風に思いました。

太田 すばらしいですね。鳥かごなんですけど、僕は見て非常にびっくりしました。こんなの当時見ている子どもどれくらいが分かったかと思うんですが、鳥なんです。これは『アルプスの少女ハイジ』の最初の場面で、ヤギのユキちゃんは孤児のハイジと同じでハイジが自分を投影する存在としてすごく有名なんですけど、最初ちゃんとユキちゃんの上に鳥がとまっております、それからあの有名なブランコのシーンもちゃんとハイジの頭に鳥がとまっていて、それからハイジが空を飛ぶ。このオープニングを見た後に、鳥かごと拘束されている 2 羽の鳥を見る。ハイジそのものが鳥かごの中の鳥なんです。そこから開放されるという物語っていうのが最初の 1 シーンで象徴的に描かれている。神田橋先生は、初回面接の中に面接の全ての流れがあると。言われればそうかと思うんですけど、我々はそういうことをなかなか気づかない、見過ごしてしまうという。臨床家としての訓練にも結構役にたつ。これをやり始めたのは光元和憲先生の『内省心理療法入門』で「となりのトトロ考」というのがあってそれがすごい面白くて、他にもできないかっていろいろネタを探してやっています。

結構引きこもりの学生さんに、「どうでもいい授業な

んでとにかく座ってるだけでいいから来なさい」って、そういう使い方もしております。2 羽のニワトリというのは、ハイジはかごの中の鳥なんですけどもクララもかごの中の鳥なんです。ちゃんと後にクララがかごの中で鳥を飼っていて、鳥を逃がすけどやっぱり外の世界では適応できなくて戻ってきちゃうというような表現がされています。じゃあ次のビデオ。初回のハイジ脱ぐというビデオですけど、<ビデオ>止めてください。羽ばたいていたのが分かるかと思うんですけども、象徴的に飛んで鳥になっているわけですね。厚着をしていましたけどあれもやっぱり注目すべきポイントです。お婆さんがアルムの山に連れてく時に、荷物になるからとたくさん着せて荷物を運ぶのを避けると。ナチスが強制収容所で人を運ぶ時にこうやったということです。そういう人間疎外みたいなものからの開放っていうような側面も持っているわけですね。

じゃあ次の部分行きます。アルムの山にやってきて夢を見るんですが、<ビデオ>はい、ここにも開放のモチーフがあります。ハイジは耳が遠いお婆あさんのところに預けられていて、いわば鳥かごの灰色の空間の中に閉じ込められていてそこから山の中に来て開放されるんですけど、おじいさんは若い頃放蕩の限りをつくして人を殺した上に逃げていた方なので、そういうところに預けられて当然ハイジは不安なわけです。NO と言えない「いい子」のハイジの姿が描かれていると見ることもできるかなと思います。結構深いでしょ、ハイジ。これを最初に思いついたのはフロイトのヒステリー研究を読んだ時で、ハイジもクララも解離性のヒステリーなんです。ハイジは夢遊病になっちゃうし、クララはてんかん性のヒステリーで歩けない。ちょうどこれはフロイトがヒステリー研究を書かれていた頃で、アルプスっていうのはそもそも精神病になった人を預けて保養させるといったような場所でした。メラニーラインもアルプスで静養していますが、この作家のお父さんが医者でそういう仕事をしたということです。

もう 1 つ次の課題を。『千と千尋の神隠し』ですが、<ビデオ>はいストップ。お父さん異様なスピードで突進していましたが、あれはどうしてでしょう。じゃあ青

い襟の方、なぜお父さんはあんなに無茶なスピードで突進したのでしょうか。

フロア トンネルがあるってわかってなかったと思うんですけど、引き付けられるみたいな感じがしてたのかなと。

太田 はい、怪しい力でね、こういうのを課題に出して学生にレポートを書かせますと、これはすごくおもしろくて、毎年やってるんですけど必ず新しい発見がある。いかに自分の知らないことを学生が言ってくれるかっていうのがすごく面白くて、いろんな見方があるんですね。理系なんで結構客観的に性格に結びつけたり、心理状態を言ったり、「千尋を楽しませたい」とかちょっと変なものもありますけど。そういう中で引き寄せられたとか、異界への移行とか、千尋の受身性とか。僕が変なことを言うもんですから、心中とかそういうことを書く学生もいたりします。さっきは単なる象徴解釈でしたけど、そういうのをこんなビデオを使って、ちょっと別のビデオと重ねることで別の角度から見るっていう訓練をしたりします。

次のビデオお願いします。＜ビデオ＞はい、ありがとうございます。こういうのを猪突猛進と申します。わき目も振らず突進していく状態はイノシシの特性です。それでお父さんのイノシシが去勢されていっていか家畜化されて豚になるわけです。そういう意味ではお父さんは文明の力を持っていて、ここではイノシシ状態で突進してきて、だんだんもう豚化が始まっています。そういう風にこじつけて説明したりしますが、ここでもう1つ重要な役割があるんです。猪突猛進、千尋を顧みない、これは僕、「まなざしの物語」だという風に思っているんですけども。物語もう1回持っている方は見ていただくと分かると思うんですけど、お父さんと千尋、お母さん、ほとんど目が合っていないんですね。遠くの引きのシーンでは目が合うことがあるんですけど正面でお互い見つめあうということがほとんどなくて、勝手にお父さんたちは進んでいって、つまり千尋が目に入っていない。それでここでも見るという機能を失っていて鼻を使ってお父さんはかぎ分けているわけですね。この後に千尋を見るわけですけど、ここで大事なものはお父さん

の視線は千尋が千尋だって分かっていないということ。それが彼女にとっては非常にショックな出来事です。それはなぜかと思うと、千尋が川に落ちてってというのは両親が保護的な機能というのを失って、言わば見てもらっていないという、それがテーマパークに来て川を横切るシーンが何回も繰り返されるんですけど、そこで活性化されて「見てもらえない」ということが、トラウマとして体験される。最後には千尋は親を認識できるんですけど、結局親たちは千尋を見て分かってるわけではないんですね。だから面白いのは最後の部分が非常に最初と全く同じパターンを繰り返して、普通だったら成長すると最後は元気になって先に歩きそうなもんですが、千尋は全く同じようにお母さんと繋がって帰っていくわけです。そこはやっぱりこの物語が単なる成長物語じゃなくて、過去にさかのぼる。過去の自分のトラウマっていうか親に見てもらえないっていう体験を自分なりに整理する体験であったからという風に僕は考えています。

毎回400字のレポートをなるべくコミニカティブに、いろいろ戦略練りますね。携帯に私のメールや電話番号入れてもらうとか、レポートでやり取りを繰り返すとか、それでコミニカティブにすることでなるべく敷居を低めて、いろんな相談に繋げようという風にやっております。そういうのを論文に紀要に書く。今年『おじゃ魔女ドレミどっか〜ん』について書いてみました。最後にこんなまとめをやって終わります。やっぱりいろんな角度から物を見て、その立場自体を常に批判的に見ろということを授業を通じて投げかけております。

司会 太田先生ありがとうございました。それでは指定討論の鶴田先生、お願いいたします。

指定討論

鶴田 和美（名古屋大学）

鶴田 名古屋大学の鶴田と申します。まず私の考えを述べて、後はみなさんへのご質問です。私も相談をしたり物を書いたりしながらFDをやっているわけです。学生相談に関わる我々は3つの言葉を持つ必要があるように感じています。1つは相談の言葉ですね。学生とのや

り取り、実践のやり取りの中での言葉です。もう 1 つは研究の言葉でしょうか、実践をまとめていく言葉ですね。それから最近特にもう 1 つの、今日皆さんお話をくださったような教育研修場面での言葉っていうものを我々は持たなきゃいけないという感じであります。それを話し言葉で伝えるという風に感じています。

まず、相談の言葉っていうのは我々は非常に生の経験の蓄積。経験と共にカウンセラーとしての自分らしさが加わってくると思います。やり取りの相互性というものがありますし、新鮮さが勝負です。その場限りの言葉で我々は勝負している。もちろんカウンセリング的であり心理療法的でもあるわけですから非常に曖昧な意味を持ったり、多義的であったりデリケートであったりします。そういう言葉を我々は面接室の中では使っているように思います。一方で面接室の中の仕事をしっかりと外の世界に伝える必要があると思います。そのベースは研究にあると思います。その実践を事例報告で書いていくわけですが、大きく言えば実践の全体像を得る。それから視点とか軸とかを得ることも大事です。そういうことは書くことによって生まれてくるように感じています。あるいは学生相談固有の物語を探すような作業を我々はどこかでする必要があります。それは書くときに一番出すと思います。自分にしかない言葉を探す。それから研究っていうのは意味づけてそれを事実で裏付ける。客観的な事例にしてもデータにしても、客観的な事実でもって裏付けたことをしゃべる。そういうブレーキが研究ではかかるわけです。

今日話題になっているのは教育とか研修場面での言葉だと思います。これは相談とは別の言葉ですよね。相談場面では非常に曖昧なものを大事にしているわけだけども、ここでは一義的な言葉でわかりやすくメリハリをつけている。端的に言えば結論から始めるような話し方をしなければいけない。良いところを伝えたり面白さが必要であったりと思います。また、素材の工夫も必要です。それから研修とか FD とか、授業をするという反復ですよね。そういった工夫も必要だと思います。

我々が教室とか研修の時にしゃべる言葉はみなさんどこで作られるかです。やっぱり私はそれは実践、相談

の言葉であるんだけどそれをいかに研究というようなもので固めて、その後、教育研修の場で語るっていうのが我々にとって望ましいんじゃないかっていう風に考えます。自分で書くという作業をした後にしゃべると言葉が研ぎ澄まされると思いますし、全体と部分が対応すると思いますし、非常に鮮度が高い言葉、自分なりの言葉が出てくると思います。以上が総論です。

それでは各先生に質問を出させていただきます。青野先生には FD の意義についてお話いただきましてありがとうございます。私の経験では今まで「教授会の前に時間作るからやってくれ」とか「自殺が起こった学部でやってほしい」とか、そういう非常に限定された場面なんです。もうちょっと教授会の前以外にやるような、もう一つ面白くて先生が出たくなるような教員への FD みたいなものをどういう風に工夫したらいいかってことを私は常々考えておりまして、そのあたりについてお話させていただきたいと思います。齋藤先生は、個人相談と研修との循環が必要というご指摘がありました。その通りだと思うんです。齋藤先生は事例をコンパクトにまとめてお話されるんですが、研修の場合どういう風に伝える工夫をされているかを教えていただきたいと思います。もう一つはプログラムに書いてあったんですけど、「研修することが研究的な新たな考察や課題発見にも結びつくと考えている」ということがどういうことかももう少し教えていただけたらと思います。森田先生へのご質問です。新入生対象の講義のテーマが、時間割等をうかがっていて、いわゆる従来の学生相談的なものをする講義っていうよりは学生生活支援ですよ。いろんなそういう具体的な「それにはこうしたらいいよ」というような授業があり、それに大きくシフトしているというように感じました。それは森田先生だけでなく全体的に我々もシフトしているのかもしれませんが。それはどういうことかということをお教えください。学生相談から学生生活支援にシフトしている辺りのことについて教えていただきたいと思います。太田先生のコメントです。アニメが使われたことをとても興味深く感じました。1 つは今のアニメは臨床心理学のおもしろさを伝えることができると思うんですけど、是非学生相談

の面白さを伝えるようなそういう教材というものがあるかどうか、その辺りを教えてほしいと思います。例えばハイジの最初の場面が鳥かごから開放される象徴的意味とおっしゃいましたが、細部はとても面白いんですけどもそういう講義が全体としてどういう中にあるのか、細部の心理的面白さを伝えることを超えて全体像はどうなっているかということをお教えしてほしいと思いました。以上です。

司会 ありがとうございます。それでは青野先生からご発言よろしいでしょうか。

青野 教員研修ですが、特定の対象というのではやはり教授会の前とか後しか私も経験がないんです。ただ、カウンセラーも私は一緒だと思うんですけど、需要があってこちらの側から出ていくというのではなくて、私がいるFDのセンターなどでは、毎週木曜日5限目に「FDの日常化」と呼んでいるんですけど、連続して共同学習会というものをやってます。この4、5年の間で200回近くやっています。いろんなテーマでいろんな先生に、あるいはカウンセラーに報告をしてもらって、その都度参加者は違うんですけど、あそこに行けばなんかやってくるぞと。自分の関心のあるところだけに出ていい、つまみ食いでもいいのでFDを継続的にやる。仮にカウンセラーの方がFDを何か継続的にやろうとする場合でも私はそういうものでいいんじゃないかという風に思うんです。それができるかどうかは別にして、例えば保健管理センターで、毎週は難しいかもしれませんが月に1回カウンセリングに関するFD共同学習会など、毎月第何週何曜日というのを決めてやればいいんじゃないか。こちらから出かけていくっていうのは学部なんかでは押しかけはちょっと無理なんじゃないかと思うんですね。FDセンターでやっていることからすると「継続は力なり、毎週決まった曜日の決まった時間に行けば何かやっている」というそういう取り組みをずっと続けています。

司会 では齋藤先生お願いします。

齋藤 1点目は相談と教育相談のモードをどう切り替えるかですね。カウンセラーとして仕事をする場合にはもちろん目の前の学生さんと1対1でじっくり話すと

いうモードが中心ですけど、それに加えて電話対応とか事務仕事とかあるいは研究もそうですけど、そういったことに速やかにいかに切り替えられるかが大事になってくると思います。私の場合には面接しながら電話対応したりインテーク面接の受付をしたりということわりと開かれた形でするのでその辺の切り替えは比較的得意なほうではあるんだと思うんですが、ただ教育研修に対するモードへの切り替えは其中でやっぱり苦労しますよね。基本的には移動する電車の中とか歩きながら徐々に自分を切り替えていく。もし他大学にうかがう場合でしたらそのキャンパスを歩くとか、学生さんたちの姿を目の当たりにするとか生協食堂に行ってみるとか、空気を感じることで切り替えるということがあるかなと思いました。

2番目に、研修を担うことが新たな考察や課題発見にも結びついていくというのはどういうことかということで、1点はいかに伝えたい内容を、伝える言葉を吟味するか。その中で自分の中に課題が見えてくる、整理されてくる。「あ、これはこうまとめることで私自身がこれから新たに考えなくてはいけないことはこういうことだったんだな」ということが自分の中で整理されるというのが1点あったかなと。それから2点目には教職員の現状やニーズが見えてくるわけです。「わりとしらっとしてるな」とか、「こんなに熱心に聞いてくれるんだ」とか。あるいはグループワークの中で意外な希望が聞かれたり何に困っているかという心情が吐露されたりということでそのためにお役に立てることはなんだろうということが今後につなげていく、そんなことをちょっとイメージしました。

司会 では森田先生よろしくお願いします。

森田 新入生対象の講義のテーマが学生相談から学生生活支援に大きくシフトしている、どうしてかということなんですけども、私は学生相談と学生生活支援と両方やっているつもりでいます。年々ニーズが「友達を作りたい」という方向へ変化してきている。それに対してこちらも対応を変えている。ですから学生相談室から得られた知見を基にすることと高校生を大学生にする、そのためには何が求められているかというのを学生

の声を聞きながら、あるいは反応を見ながら少しずつ講義をしていっている最中だと感じています。

それから「抱えるから自立させる」へのモードの変化が、生活支援から心理相談への変化ということになるのかということですが、私の実感としては、まず新入生は安心できること、安心して大学に居れることが大事かと思います。それから誰かと繋がること。それを授業の中でできればいいかな、それは生活支援ということにもなるかと思います。心理相談への変化には、私の中でピンとこなかったんですけども、自分で最初は安心して繋がることのできたら今度は自分でやっていけるという流れをイメージしていました。この心理相談という言葉からちょっと連想したのが、最近はカウンセリングにのらない、のりにくい学生が増えてきている。カウンセリングにのせるには自分の悩みが自覚できないといけなく、言葉にできないといけなく。それを人に委ねる、人に援助を求めるといことができないといけなくのですが、その辺の前提がなかなか難しくなっていることを感じますので、この講義の趣旨の一つのカウンセリングに直接こられない人のためのサポートもありますが、そこである程度カウンセリングを受ける力が育ってくればカウンセリングに繋がっていく、そういうことはあるかなと思います。

司会 ありがとうございます。では太田先生よろしくおねがいします。

太田 はい、まず臨床心理学的面白さだけでなく学生相談の面白さを伝える授業の工夫ということで、考えてみたんですけどやっぱりこれは僕の臨場的なスタンスって言うか、一応比喩を込めて言っていると思うんですね。作品を象徴的に好き勝手に解釈すればそれでいいっていうんじゃなくて、自分をどう捉えるかという問題に重ねて言っています。自己像をどう捉えるか。ただそれをあんまり直接に言っちゃうと、「うざい」とか「め

んどくさい」とか、ただでさえ内省できない学生さんがやっぱり多いなと感じているので、「自分というものをこういうふうに見ているけど実はちょっと視点を違えて見ればそれは別の存在として捉えられるんじゃないか」という問いかけがあるんじゃないか。そういうように見るのは実は楽しいことでもあって、新しい発見でわくわくするような喜びもあることなんじゃないか。そういうのも込めているつもりです。

それからもう 1 点、ディテールと全体をどう結びつけるかということですが、クライアントの方はディテールの言葉を語るわけですよ。「今日これはこうだった」とか、それはみんな断片にすぎなくて全体を語るってことはまずない、そういうバラバラな手がかりから失われている全体像を紡ぎだすような作業がセラピーの本質なんじゃないかなと思っていて、いいレポートっていうのはただ面白くつなげただけじゃなくてその人のあり方や生き方が自然に反映されているようなものだと思います。そのへんがディテールだけに終わらない工夫。鑑先生の身体性の話をちょっと思い浮かべましたけれども、腑に落ちるとか、そういうレベルで語られているかどうかという辺りが大事なかなと思いました。

司会 ありがとうございます。学生達の間から「カウンセラーの授業はなんか面白いわ」とか、「カウンセラーの授業をみんな受けようよ」みたいな話が全国各地からあふれて出てくるといいなと、そんなことを思いながらシンポジウムを終わろうと思います。話題提供の先生方、指定討論の鶴田先生どうもありがとうございました。